別冊太陽

武井武雄

絵本名画館

おとぎの国の王様

特別付録

肉筆絵本

王様の馬車と乞食の馬車

武井武雄

おとぎの国の王様

地図（昭和42年）　地図の英文字を右から読むと…

おとぎの国の王様

銅版絵本

絵本工芸館

武井武雄

目次

おとぎの国の王様
巻頭エッセイ 四 思い出すことなど―永井路子
絵本の愉しさ、童画の魅力を、今、もう一度 六
イソップ物語 一八 「キツネのごちそう」「かりうどと木こり」ほか
アンデルセン童話集 二〇 「小さな人魚姫」「夢神」「チビ子物語」
森のピノチオ 四二 絵本人形芝居
装幀 四四 一時代を画した造本美術の粋を紹介
武井武雄ギャラリー 五八 美術の香気豊かなパステル画……
西堀燈籠戯画 六六 故郷の神社を飾った、ユーモラスな燈籠画
「地上の祭」
版画の極地を示した豪華本を再現 七三
作品論 八五 武井武雄の童画―藤田圭雄

おもちゃの博物館

遊び心を堪能させる、おとぎの国の王様の手技のすべて

九八
イルフ・トイズ　九八　新しい玩具の創造をめざして
ミニアチュール　一〇〇　繊細な感性が光る小宇宙
雛人形　一〇二　毎年一段ずつ丹念に作られた武井家の雛人形
かるた・トランプ　一〇四　独特のモダニズムをいかんなく発揮
陶印と肉池　一〇六　しっくりと手になじんだ自作の愛用品

あらゆる技法をこらした本の城

八九
刊本作品

版画工房から

自由闊達な描線が展開する精緻な美の世界

一〇七
こけし図譜　一一四　伝統美のさまざまな表情をとらえる
年賀状　一二六　年の始めの手作りメッセージ
評伝　一三一　「幻想画家」への道―飯沢匡
武井武雄年譜　一三一
武井武雄著作目録抄　一三四
次号予告　一三六
特別付録――肉筆絵本　王様の馬車と乞食の馬車
奥付

カバー＝猫と鼠「チャイルドブック」（昭和四二年一一月号）
大扉＝EMARATED 半島全図（昭和四二年）
アートディレクション＝佐藤浩　レイアウト＝佐藤浩・野村俊夫
編集＝高橋洋二・久田肇・秋山礼子・岡みどり・小島貴子
澤田陽子・鈴木道子
校正・大木かおる　写真＝石田重次郎・本誌写真部

思いだすことなど

永井路子

かけだし編集者のこの上ない楽しみは、本の上でしか知らない画家、作家の「実物」にお目にかかれることである。昭和二〇年代の半ば、小学館に入社した私は、武井先生のお宅へ伺うことになったとき、ひそかに胸を躍らせた。

「子供のころから、先生の絵が大好きで」

御挨拶をした後、早速申しあげると、

「そういうことを言われるのはどうも――」

有難くないな、という顔で「実物」はむすっと仰せられた。御機嫌が悪いのではない。

――おいおい、あまりこっちのトシを考えさせるようなことを言うもんじゃないよ。

という、ちょっとひねった御挨拶だったのである。

以来、何度先生のお宅へ伺ったことだろう。大分経ってから、豆本（当時はそう呼ばれていた）を見せていただいたが、「私にも頒けていただけますか」という言葉が出なかった。ショックが大きすぎたのである。とうてい手の届くものではない、という気がした。童画家・挿絵画家である先生のイメージが変ったのはこの瞬間だった。

やっと勇気を出して、「私も……」と申しあげたのは次にお訪ねしたとき、そのころは幸いにもまだ欠番があって、即座に仲間入りを許していただいた。

先生の御手許には、戸籍台帳ともいうべき原簿があって、それぞれの本の何号の持主が誰とはっきりわかるようになっている。

「自分もこの本は儲けるためにやってるんじゃない。だから売って儲けたりしてもらっては困る。売ったとわかれば即座にパージ」

限定本を作る方と持つ方の責任のとり方をしめすこのルール、先生らしい厳しさだと思った。先生はふつうの画稿の場合でも〆切を厳守される。一度も遅れたことがないという神技に近い姿勢を通して来られた。その代り編集者側でうっかり〆切を忘れようものなら、平身低頭してもなかなか渡してくださらない。そういう面での厳しさは知っていたが、より厳しい姿勢がそこにはあった。

「売るなら持つな」

これは愛書精神の原点である。

先生とのつながりをより濃いものに感じるようになったのは、友の会に出席させていただいてからだ。第六回の友の会は、昭和二六年一〇月、「もりどんの話」の開頒に際しての集いだった。上野韻松亭に集まったのは先生を含めて一九名。女の出席者は会発足以来初めてということで歓迎してくださった。

先生の制作についてのお話が始まる。一見何気ない胡粉刷りが、じつは大変な技術を要するものだというようなお話に仰天する思いだった。私は版画のことは全くわからない。突込染だの、二度摺、三度摺などという言葉に目を廻しながら、こういう世界があるのかと思い知らされた。限定本マニアともいうべき、その道の「通」の方々にも初めてお目にかかった。

もっとも、私が「もりどんの話」に魅かれたのは、その中に溢れる詩情である。一作ごとに先生は版式にふさわしいお話を考えられ、自分で文章を書かれる。その戯文めかした語りくちが何とも楽しい。以来、武井ファンとして私はこの世界に執着し続けてきた。限定本マニアでもなく、版画マニアでもなく、いわば素人派とでもいうべきか。

そういう私ではあったが、友の会で先生の技術的な御苦心の話を伺うことは有難かった。作品を頂戴する以上、ぜひそのお話を伺うべきだと思った。やがて私以上に武井ファンでもある夫も友の会には出席させていただくようになり、夫婦出席第一号という前例を作った。

ユーモアを混えてのお話の中に、先生の作品制作に賭ける情熱が伝わってくる。何歳になられても変らない創作意欲、もの書きとしては教えられ、励まされることばかりだった。

それに比して、先生にお返しできたことは皆無である。一三九番「天竺の鳥」の開頒に先だって、偶然、お嬢様の三春さんから、

「インドのお菓子、御存じありませんか」

と尋ねられた。友の会の折にはその作品に因んだお菓子が、先生デザインの版画入り敷紙（しきがみ）に載って配られる。「天竺の鳥」はインドの物語だったためのお尋ねだったのだ。夫と二人、あちこちインド料理店を歩いて、やっとよさそうなものを見つけてお知らせすると、几帳面な先生は早速、ありがとう、とお葉書を下さった。

が、その数日後、先生は急逝され、いただいた葉書は絶筆に近いものとなってしまった。追悼の思いをこめて行われた開頒の日、先生デザインの敷紙に載せられたそのお菓子は、遂に召しあがっていただくことはできなかったのである。

（ながい　みちこ　作家）

おとぎの国

大正一一年、大型絵雑誌「コドモノクニ」創刊。表紙は武井武雄。大正一三年、武井武雄童画展。〝童画〟の二字が初めて世に現われた。昭和二年、日本童画家協会結成。彼はやはり中心にあった。童画―子供のための芸術。八九年の生涯はつねに、それとともにあった。

「コドモノクニ」（東京社　大正14年5月号）の表紙

王様

小悪魔ピッピキの話 「小学少女」(研究社 大正11年11月号)

「コドモノクニ」創刊号（東京社　大正11年1月号）の表紙。タイトル文字も武井による

ひぐれ 「コドモアサヒ」(朝日新聞社　大正12年11月号)

蛙の学者 「コドモノクニ」(東京社 大正14年7月号)

鳥小舎の雨 「コドモノクニ」(東京社 大正14年7月号)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

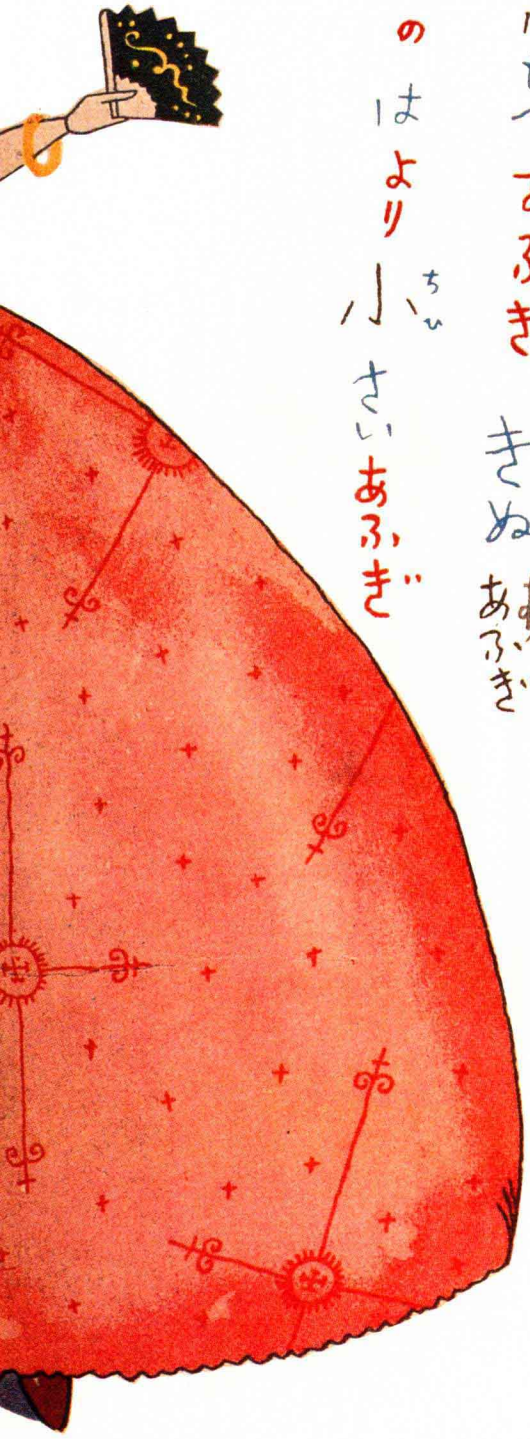
ふとれよ、ふとれ 「コドモノクニ」(東京社　大正15年12月号)

オモチヤ ノ ガクカウ 「コドモアサヒ」(朝日新聞　大正15年９月号)

人形のあふぎ

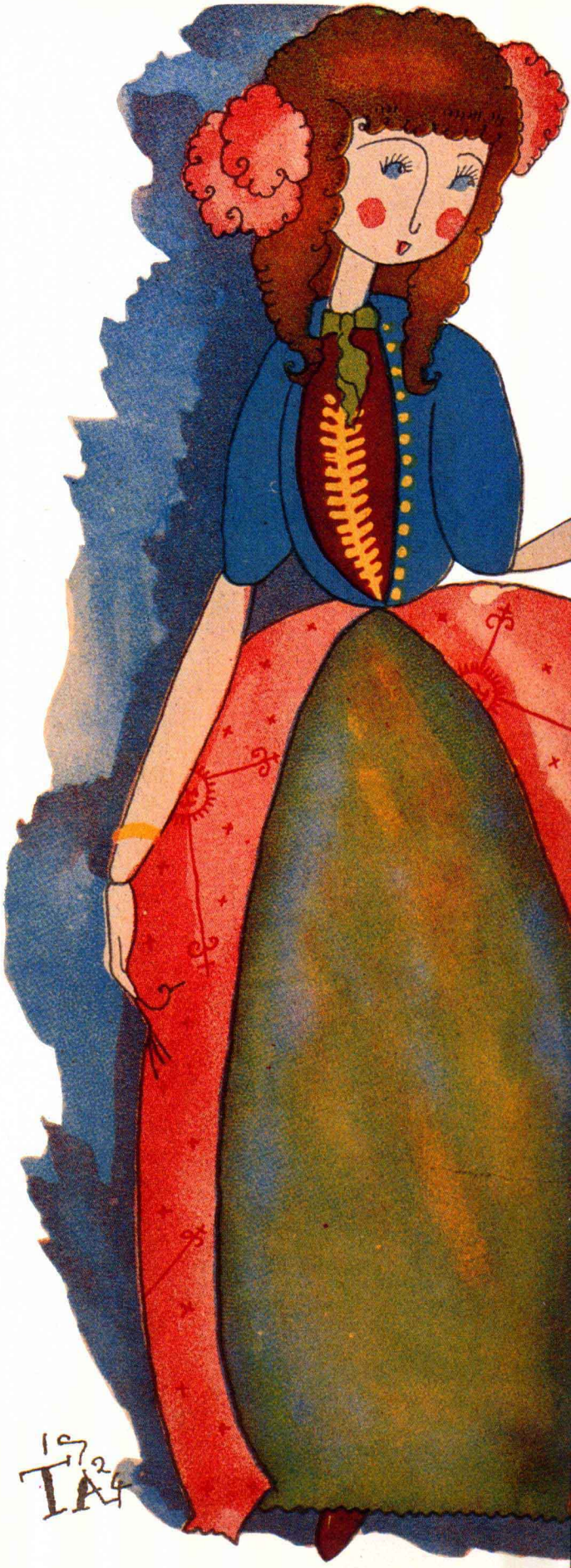
人形の手にもつあふぎ　きぬあふぎ

しいてふのはより小さいあふぎ



武井武雄

人形のあふぎは あまり小さくて
はなのさきしか風はこぬかな



人形のあふぎ 「幼年の友」(実業之日本社 大正13年7月号)

モナーコ ノ ニホン がに

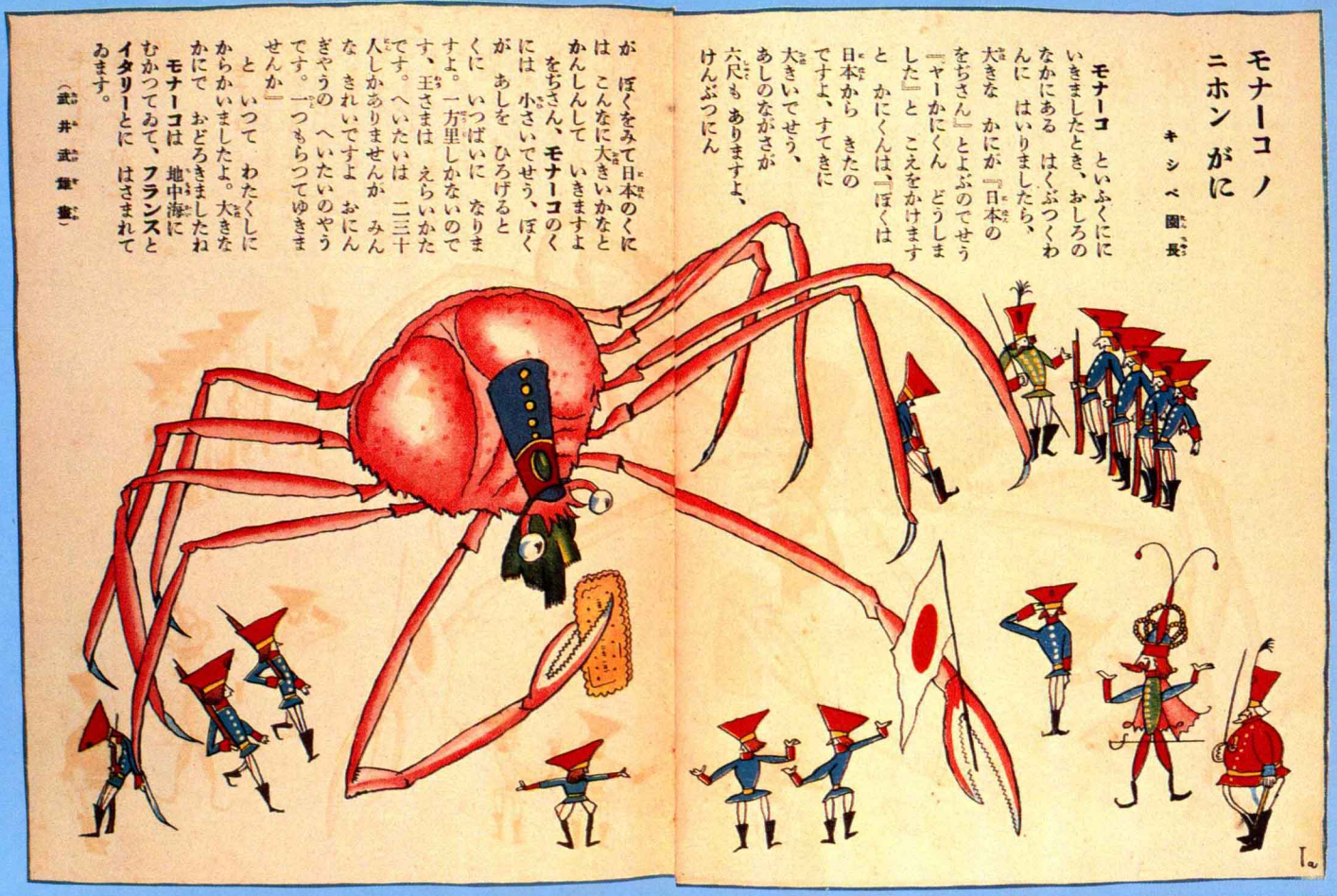
キシベ園長

モナーコ といふくにに いきましたとき、おしろの なかにある はくぶつくわんに はいりましたら、大きな かにが『日本のをぢさん』とよぶのでせう『ヤーかにくん どうしました』と こえをかけますと かにくんは、『ぼくは日本から きたのですよ、すてきに大きいでせう、あしのながさが六尺も ありますよ、けんぷつにんが ぼくをみて日本のくには こんなに大きいかなとかんしんして いきますよをぢさん、**モナーコ**のくには 小さいでせう、ぼくが あしを ひろげるとくに いつぱいに なりますよ。一方里しかないのです、王さまは えらいかたです。へいたいは 二三十人しかありませんが みんな きれいですよ おにんぎやうの へいたいのやうです。一つもらつてゆきませんか』

と いつて わたくしにからかいましたよ。大きなかにで おどろきましたね

モナーコは 地中海にむかつてゐて、**フランス**と**イタリー**とに はさまれてゐます。

（武井武雄画）



モナーコ ノ ニホンがに 「コドモノクニ」（東京社　大正12年6月号）

歸る雀

武井武雄謠・畫

♦

一丁目の雀と
二丁目の雀と
ちよんちよんちよんからこ
ちよんと鳴いていつた。

♠

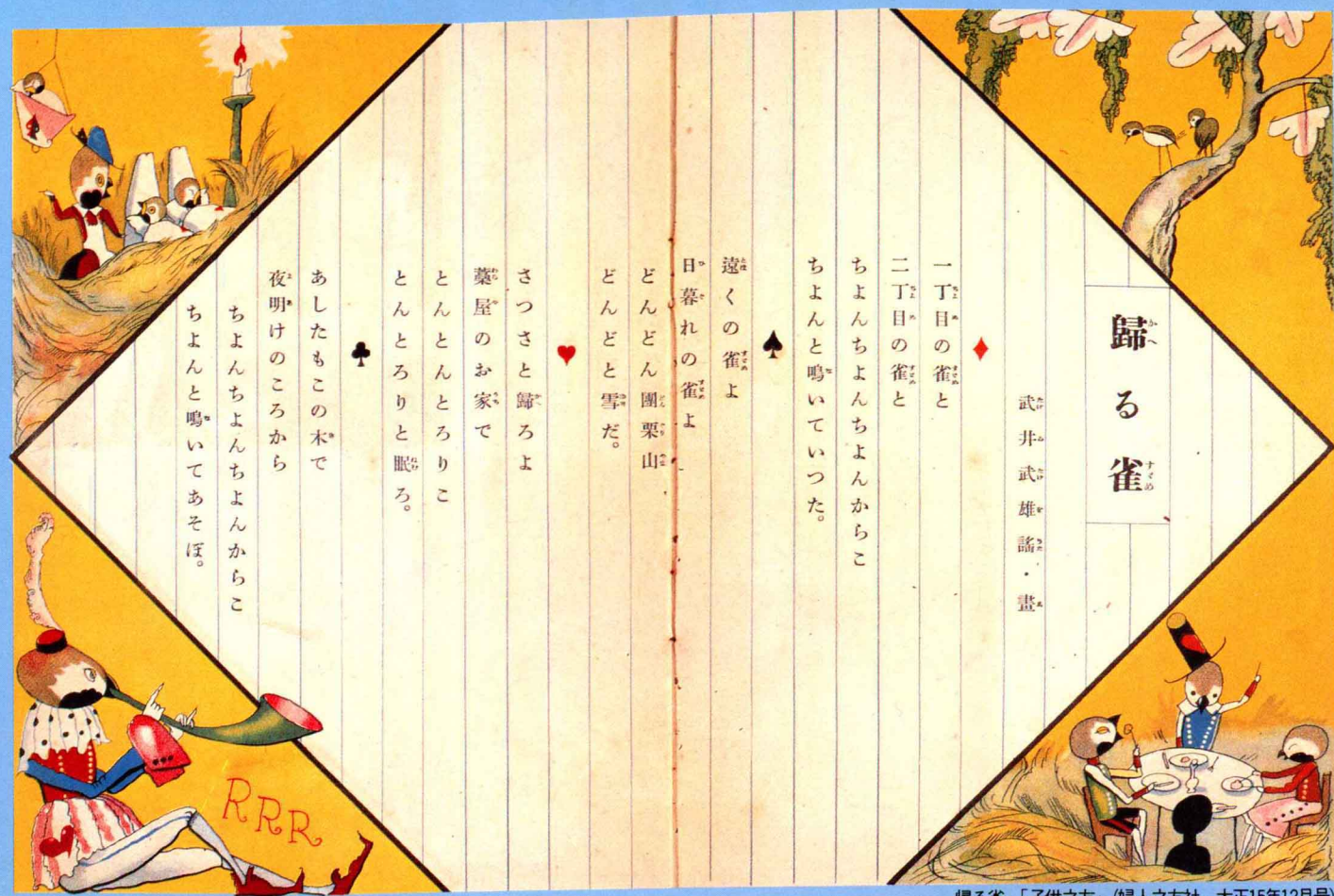
遠くの雀よ
日暮れの雀よ
どんどん團栗山
どんどと雪だ。

♥

さつさと歸ろよ
藁屋のお家で
とんとんとろりこ
とんとろりと眠ろ。

♣

あしたもこの木で
夜明けのころから
ちよんちよんちよんからこ
ちよんと鳴いてあそぼ。



帰る雀 「子供之友」（婦人之友社　大正15年12月号）

ハタオリナガ
ラノ子守歌
サトウハチラウ

ネントン　ネントン
オコロリトン
オコトン　ロリトン
オヤマノトン

ハタオリ蟲ノ母サンガ
ハタオリナガラウタヒマス

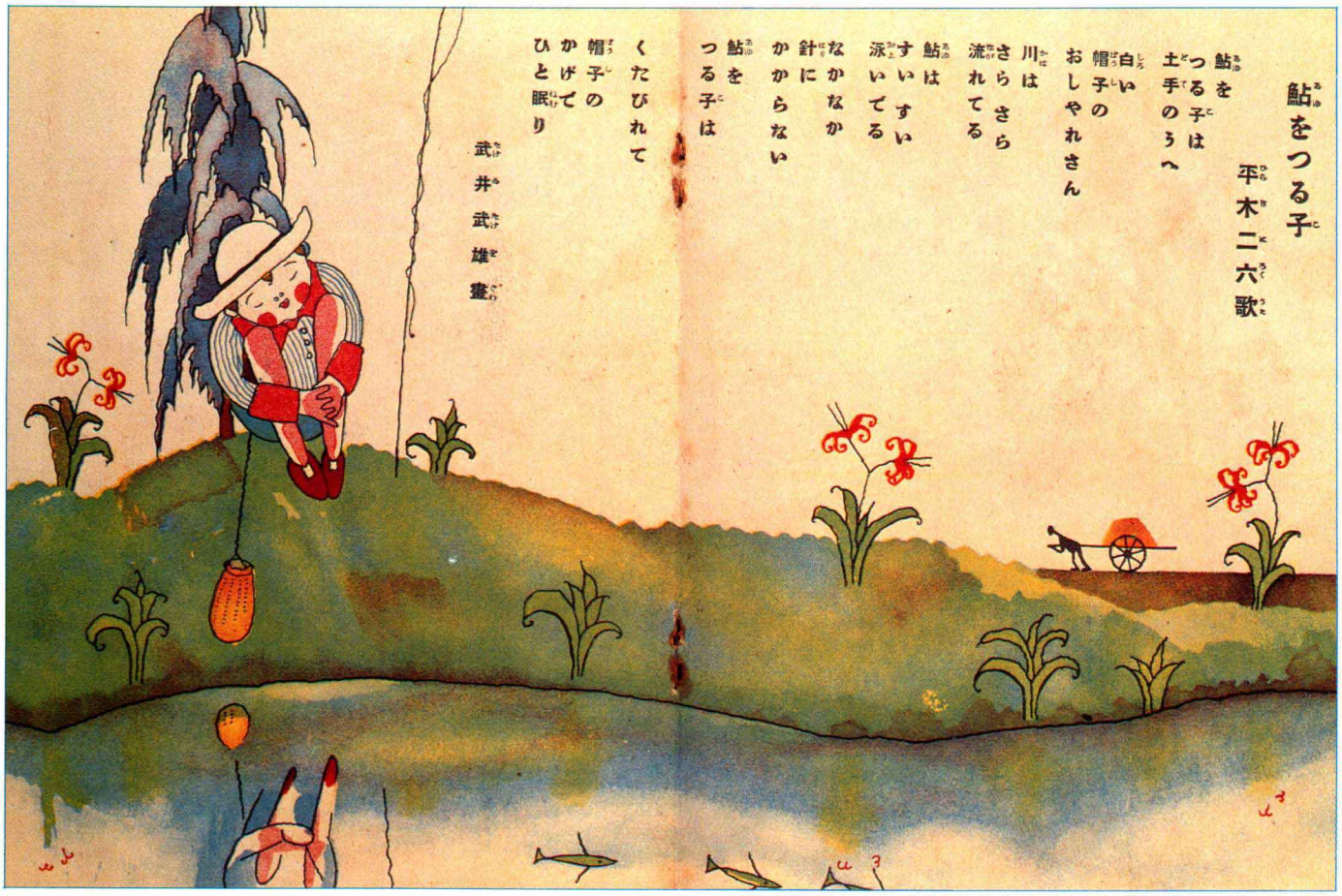
ネントン　ネントン
オコロリトン
オコトン　ロリトン
オヤマノトン

武井武雄繪

ハタオリナガラノ子守歌　「コドモアサヒ」（朝日新聞社　大正15年10月号）

玉虫「コドモアサヒ」（朝日新聞社　大正13年7月号）

オシロイ バナ 「子供之友」（婦人之友社　大正12年２月号）



鮎をつる子 「幼年の友」（実業之日本社　大正13年７月号）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com